

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 24 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24659544

研究課題名(和文) 微細対人機能障害患者におけるアスペルガー障害因子の検出テストの開発

研究課題名(英文) Development of a test for the detection of essential elements for Asperger's syndrome among slightly damaged in the human relational abilities

研究代表者

小川 豊昭 (Ogawa, Toyoaki)

名古屋大学・総合保健体育科学センター・教授

研究者番号：20194441

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：高機能の軽微アスペルガー者は、健常者とほとんど見分けは出来ず、社会的にも問題なく機能しているように見える。しかし、対人関係において彼ら特有の困難があり、特に家庭生活において問題が生じることが多い。我々の研究では、健常とみなして問題の無いケースであえてそこに自閉的要因を見出すことで、抑うつなどの問題を正しく治療する道を開いたといえる。

健常者の場合、ミラーニューロンの働きで、自動的に我々意識を持ち、それが集団無意識として機能している。ところが超高機能アスペルガー者は、その根本において異なっている。それは、他者との関係を知的にシミュレーションしてすべてがシステム化にもとづいているという点である。

研究成果の概要(英文)：High functional Asperger's patients seem to live in social relationship and in family environment without any problem. But they have specific difficulties in human relationship. As we have detected autistic element in the base, we became able to treat their problems correctly. In the normal subjects they have "our consciousness", which has its roots in collective unconsciousness. Collective unconsciousness is made possible by the function of mirror neurons. But extremely high functional Asperger's subjects do the simulation of mental functioning of others just as computer do with their thinking tool of systematization.

研究分野：精神病理学 精神分析学

キーワード：アスペルガー障害 自閉スペクトラム システム化 我々意識 対人困難

1. 研究開始当初の背景

いわゆる発達障害、あるいは自閉スペクトラムの診断については、様々なテストや診断基準が開発されてきていて、特に診断が問題となることはなかった。ところが一見軽うつ病や引きこもりや摂食障害の中に非常に難治性のあるものがあることがわかってきた。すなわち従来の疾病分類では、なにか別の要因を見逃していることが明らかになってきたのである。この別の要因がほとんど正常と違って良い患者の基盤にあるアスペルガー的要因であることがわかってきた。

従来は、発達障害者は、完全な自閉症児から正常者まで連続的に移行していると考えられていた。そのため、見たところ全く正常人の中にあるアスペルガー的要因は、特に病的とは考えられておらず、特に注目もされなかった。

このアスペルガー的要因は、従来の DSM - 、などの診断基準では、その存在も無視されていたし、そもそもこれを探知する方法もなく、その意識もないというのが現状であった。

2. 研究の目的

この研究の目的は、特に高機能のアスペルガー障害を対象にして、全く健常者として見えるケースの奥に潜む、アスペルガー的要因を取り出し、その性質を明らかにすることであり、その結果、その探知の方法を確立することであった。ここで対象とするケースは、いわゆる発達障害者の特徴である、視線を合わせない、表情が乏しい、言語に何らかの異常がある、対人関係を持ってない、などの特徴は当てはまらない。そこで、別の特徴、あるいは、それを通して何らかの本質を取り出すことを目指した。すなわち、この研究の動機は、日常の臨床経験の積み重ねから、正常者とされているものの中に、そのパーソナリティの土台が自閉的というべきものの存在に気づいているという事があり、そのような臨床経験に基づく推測を更に明確にしていこうとするものである。様々な精神的不調(これは、必ずしも重いものではなく、むしろ軽い)を示すケースの中に微細な対人関係障害のあるケースのあることが明らかとなってきた。この微細な対人関係障害の本質を見ていくと、それは、一般的な健常人の対人関係の持ち方や機能の仕方と本質的に異なる仕方を行っていることがわかってきた。なぜ、このような特異な対人関係の機能の仕方が可能なのかを検討して、その特徴を取り出すことを目的とした。

3. 研究の方法

様々な疾患名で日常診療を行っている患者の中から明らかに発達障害であるものをまず除外し、そのなかで診断的には、正常人であるが、夫婦関係、あるいは異性関係において困難を感じているケースを集めた。更に

その中から、その微細な対人関係の問題が異性の気持ちがわからないということで相手を怒らせるケースを取り出した。このようなケースのなかで面接を繰り返して異性の他者主観が構成できていない患者について、アスペルガー的要因のあるものと仮定し、彼らの協力の元に彼ら自身の経験や内省を元に、彼らがどのように他者を体験しているかを検討した。

具体的には、高機能アスペルガーと診断された A 氏 (IQ150 以上、社会的にも高い地位に有り、生産性も高い) とともに、従来の発達障害、自閉症スペクトラム、アスペルガー関連の多くの理論を詳細に検討して、彼らの障害の何が本質であり何が付随的なもので二次的に生じてきたかの選別を行い、本質的なものの性質がどのようなものかを検討した。

4. 研究成果

研究成果として明らかになってきたのは、アスペルガー者は、どれほど正常に近く、全く正常者に見えても、土台が違って、本質的に全く異なった対人関係を体験しているということである。この違いは、健常者の対人関係の基盤が「我々意識」に基づき、この「我々意識」から出発して言語を獲得して社会を構成している点にある。この「我々意識」に入らないものに対しては差別や疎外を行うことで更にこの「我々性」を強固にするということが生じている。このような「我々意識」は、おそらくはミラーニューロンの働きによって、他者の姿において自身の内界を経験するという仕方で自動的に生じると言える。この「我々意識」は、更には、「集団無意識」として一体として機能している。これが人間の社会性の基盤となっているといえる。ところが生まれつきミラーニューロンが機能しないものは、この「我々意識」が機能しないのである。生まれ落ちた時から疎外された状態で成長していくといえる。そのため言語を獲得できなかったものがいわゆる自閉症者である。しかし、中には、高知能のお陰で、「我々意識」の基盤を持たないで言語をその記号の次元に於いて捉え、暗記し論理として使用することで言語を獲得する一群の高機能アスペルガー者が存在する。彼らは、共感は働かず、他者を全く謎のものと体験しているが、他者を観察することで、こういう時はこうするものである、こう反応するものであるというリストを作成し、それが成長とともに洗練されていき、非常に高度なものになると他者主観の構成を論理的にシミュレーション出来るようになる。こうなると全く健常人と区別がつかない。しかし、そのように高度なシステム化が行われて、他者との一見不都合のない対人関係が可能な場合でも、異性間の微妙な対人関係を行うには不十分であり、破綻することになる。この破綻から夫婦関係が壊れたり、鬱になったりと

いう二次障害が生じる。すなわちアスペルガー者の世界は、独我論の世界であり、それを土台に一見他者との共同主観を構成しているかのように振る舞うといえる。アスペルガー者の代表である哲学者のヴィトゲンシュタインについて言うと、彼は、いわば本来昆虫のような異質な生物である。ところが、間違っ て人間の姿で生まれて来たために、人間社会のなかで戸惑い他者をどう理解したら良いのかを懸命に模索したのが、彼の哲学といえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

1. T. Ogawa: "Here and now" as a thick living thing, JAPANESE CONTRIBUTIONS TO PSYCHOANALYSIS, Volume 4, 27-39, 2014
2. 古橋忠晃, ステファニー・ヌヴィエール, ミシェル・パトリス, コリヌ・クララク: フランスの大学生の健康上の諸問題とその対策について, CAMPUS HEALTH, 51, 133-138, 2014
3. T. Furuhashi, T. Hitoshi, T. Ogawa, K. Suzuki, M. Shimizu, J. Teruyama, S. Horiguchi, K. Shimizu, A. Sedooka, C. Figueiredo, N. Pionnié-Dax, N. Tajan, M. Fansten, N. Vellut, P.-H. Castel: État des lieux, points communs et différences entre des jeunes adultes retirants sociaux en France et au Japon (Hikikomori), L'Évolution psychiatrique, 78, 249-266, 2013
4. 津田 均: 青年期のパラノイア, 臨床精神医学, 42, 49-55, 2013
5. 小川豊昭: スキゾイドとコンテイニング, 精神分析協会年報, 3, 22-26, 2013

[学会発表](計 7 件)

1. T. Furuhashi: About the topological relationship among positions of the patient, family and university in withdrawal (Hikikomori), through a case of neurotic withdrawal (Hikikomori),

Kyoto International Colloquim for Lacanian Psychoanalysis (Forerunning session), 2014・4

2. 古橋忠晃: 現代における「正常」についての問いと精神科領域の病像の変化について, 第 37 回日本精神病理学会(シンポジウム 2 「方法論をめぐって」), 2014・10

3. 小川豊昭: 分析の終結と短期再分析について, 第 32 回 日本精神分析協会年次大会(東京), 2014・6

4. T. Furuhashi: Le syndrome Hikikomori: données récentes issues de la recherche clinique, Journal Club (Faculté de médecine, Université de Strasbourg), 2014・6

5. T. Furuhashi: Structure psychique des Hikikomori en France et au Japon, Symposium Franco-Japonais à l'Université de Nagoya sur le Hikikomori, 2013・1

6. T. Furuhashi: Le suicide chez les étudiants au Japon et la fonction de Centre Général de Conseil aux Étudiants à l'Université de Nagoya, Réunion Scientifique Franco-Japonaise sur la Santé Mentale des Étudiants: Suicide chez les Jeunes, 2013・4

7. Ogawa, T.: Psychanalyse du retrait social ou Hikikomori: Narcissisme pathologique et agressivité passive dus à une défaillance de contenant- \square contenu subie durant l'enfance, Colloque Jeunes en retrait ou hikikomori - 20 / 21 mars 2013, 2013・3

[図書](計 3 件)

- 1-1. T. Furuhashi, N. Vellut: Si proches, si lointains: Hikikomori en France et au Japon. 139-156.

1-2. T.Ogawa : Psychanalyse du retrait social au Japon--Narcissisme pathologique et agressivite passive due a une defaillance de la fonction contenante dans l'enfance-- ,186-200, Hikikomori, ces adolescents en retrait (N.Vellut, M.Fansten, C.Figueiredo, N.Pionnié-Dax 編) , Armand Colin, Paris, 2014.

2-1. 古橋忠晃: フランスと日本の「ひきこもり」の心的構造, 77-94.

2-2. 小川豊昭: 引きこもりの精神分析ー幼少時期のコンテイング不全から生じる誇大なナルシズムと受動的攻撃性ー, 181-204, 「ひきこもり」に何を見るか - グローバル化する世界と孤立する個人 (鈴木國文, 古橋忠晃, ナターシャ・ヴェル編), 青土社, 東京, 2014

3. 津田均: 気分障害は、いま うつと躁を精神病理学から問い直す, 1-288, 誠信書房, 東京, 2014

〔産業財産権〕
出願状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

取得状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織
(1)研究代表者

小川 豊昭 (名古屋大学総合保健体育科学センター・教授)

研究者番号 : 20194441

(2)研究分担者

津田 均 (名古屋大学総合保健体育科学センター・准教授)

研究者番号 : 00302745

古橋 忠晃 (名古屋大学総合保健体育科学センター・助教)

研究者番号 : 50402384